



信州大学人文学部

SHINSHU UNIVERSITY
FACULTY OF ARTS
GUIDE BOOK 2023

The left half of the page features a background of overlapping, semi-transparent green triangles and polygons, creating a complex, layered geometric pattern. The colors range from light, pale greens to deep, dark forest greens.

信州大学人文学部

SHINSHU UNIVERSITY
FACULTY OF ARTS
GUIDE BOOK 2023

WELCOME TO FACULTY OF ARTS

ようこそ人文学部へ

信州大学人文学部案内 目次

- 07 学部の理念
- 09 学部長あいさつ
- 10 教育研究目標・履修コース

- 11 COURSES | 人文学部7コース紹介
- 27 INTERVIEW WITH PROFESSORS | 人文学部教員インタビュー
- 43 ACADEMIC STAFF | 人文学部 教育・研究スタッフ
- 49 COLLEGE LIFE | 人文学部学生の4年間
- 57 TOWARD THE FUTURE | 卒業生たちの進路 & 入試案内





学部の理念

「知」にあそび、
「知」に生きる
——機動する「知」へ

信州の大自然の織りなす四季のもと、
都会の喧噪とほどよく距離をたもちつつ、
時代や人間をみる確かな目と、
他者や自然と共生できる豊かな感性を育む教育を行います。
複雑多様化し混迷する現代社会のあらゆる局面で、
不断に根源的な思索を試み、
それらに批判的・創造的にかかわっていくことのできる
「実践知」を身につけた新しい時代の
人文人(ネオ・フマニスト)を育成します。



信州大学人文学部長

早坂俊廣

HAYASAKA, Toshihiro



中国で地理学・気象学の分野に偉大な足跡を残した竺可楨(1890～1974)が、1936年から1949年にかけて学長を務めた浙江大学に、彼の言葉が刻まれた石があります。

諸位在籍、有兩個問題應該自己問問(在校生諸君。君たちには自らに問うてみなければならない二つの問題がある)：

第一、到浙大来做什么？(一つ、浙江大学に来て何をするのか？)

第二、将来畢業后做什么樣的人？(二つ、将来、卒業した後にどのような人間になるのか？)

ここで、「浙江大学」を「信州大学人文学部」に置き換えてみましょう。

一つ目の問いに「もちろん勉強です！」と答えるあなた。中国明代の思想家・王艮(1483～1540)は「楽学歌」という作品で「楽はこれ学、学はこれ楽」と謳いあげました。もともと私たちは何ものにも縛られない自由な存在で、「楽しいままでいることが学びであり、そんな学びだからこそやっついて楽しい」のだと。彼の言い分を4年かけて自ら「実験」してみるのも一興でしょう。

二つ目の問いに、「どこかに就職するんでしょうね……」と答えたあなた。もちろん就職は大切ですが、「職業イコールあなた」ではありませんし、「どういう人間になるのか？」という問いのほうが人生の一大事です。

さて、「人文学」の英語訳は「Humanities」です。「人文学部」の「Faculty of Arts」は Liberal Arts を意味する Arts を含みます。「人間とは何か」を学びながら「自由な学芸」を身につけていく場が「人文学部」であるのだとしたら、竺可楨の二つの問いは一つに集約できるでしょう。

信州大学人文学部は、多彩な「Humanities」の世界を享受しながら、人生の軸たり得る「Liberal Arts」を志す人をお待ちしています。

教育研究目標

学部4年間のカリキュラムを通じ、以下に掲げる資質や能力を養成します。また、これらの教育がより充実したものとなるため、人文学的「知」の先端を切り拓く研究をおすすめします。

心と思考の実践知

- ▶ 自明とされる事柄に対し、深くその根拠を問い直し、新たな認識を構築できる思索力
- ▶ 変容する社会を冷静に分析し、時流に迎合することなく価値判断できる批判力
- ▶ 過去の英知の批判的継承のうえに立って、創造的な未来を切り拓く開拓力
- ▶ 異質・多様なものを理解し、寛容かつ多元的に判断することができる受容力

技と行動の実践知

- ▶ 情報を適切に集約・分析・表現できる高度なメディアリテラシー
- ▶ 他者の考えを明晰に理解し、自己の主張を的確に表現できる高度なコミュニケーションリテラシー
- ▶ グローバル社会において、多様な文化を理解し、自らの文化を発信できる外国語能力
- ▶ 領域横断的な事柄に対する問題解決能力および創造的な企画構想能力

履修コース

信州大学人文学部人文学科には7つの履修コースがあります。

学生は2年次から特定のコースに所属して学習と研究を行いますが、入学後の1年間は、基礎的な学力を身につけながら、自分にはどのコースがふさわしいのかをじっくり考える期間となります。

2年次から特定のコースに所属して学習と研究を行いますが、自分の所属するコースの学問だけに学ぶ範囲に限られるわけではありません。むしろ、自分が専門にとらえた学問領域をより深く理解するためにも、そして社会で自分を活かす実践的な能力を高めるためにも、一つの領域に閉じこもらないようにすべきです。信州大学人文学部は、学生が自分の関心と意欲に応じて、他コースで開講されている授業を幅広く履修できるようにカリキュラムが組まれています。

2020年度までに入学した学生は、2年次進級時に専攻する「分野」を決定していました。

2021年度以降に入学する学生は、カリキュラム変更により、2年次進級時に7つある履修コースのいずれかに所属し、3年次進級時に所属するコースの研究室の中から主専攻を決定することになります。

COURSES

人文学部7コース紹介

教育目標

信州大学人文学部の教育目標は、専門領域について深い知識と、領域横断的な課題を解決する能力を兼ね備えた人材、即ち、「実践知」を基盤に人間がかかわるさまざまな事象に対して批判的思考力を駆使することのできる人材の育成です。

7つの履修コース

多様な教育研究資源を総合し、幅広い教養知を基盤とした汎用性ある専門的能力の向上と、国際化に対応した語学力の強化を軸に、ディプロマポリシー（学位授与方針）の着実な実現を図るため、7つの履修コースを設けます。

広域履修プログラム

人文学部は、人文学科1学科です。2年次以降は7コースのいずれかに所属して学びます。所属するコースは、1年次の終わりに希望や適性などに応じて決まります。また各専門分野をテーマによって横断し連携する広域履修プログラムによって、人文学の総合的かつ有機的な教育研究が行われています。

7つの履修コース

哲学・芸術論コース

哲学・思想論
芸術コミュニケーション

文化情報論・社会学コース

文化情報論
社会学

心理学・社会心理学コース

心理学
社会心理学

歴史学コース

日本史
東洋史
西洋史

比較言語文化コース

比較文学
西洋古典学
中国語学 中国文学
ドイツ語学 ドイツ文学
フランス文学

英米言語文化コース

英語学
英米文学

日本言語文化コース

日本文学
日本語学
日本語教育学



クラスL1～L8 (1クラス20人ほど)

L 1

L 2

L 3

L 4

L 5

L 6

L 7

L 8



※研究室の名称は、2022年7月現在のものです。

人文学部での4年間の流れ

1年次

共通教育科目と導入的な専門科目を学ぶ

共通教育科目

大学における学習の基礎となる基盤系の科目、知識を広げるさまざまな教養系の科目、そして専門基礎科目（人文学部では高年次外国語）からなります。専門基礎科目以外は主に1年次に履修します。なお人文学部では英語以外の外国語が必修です。

専門科目（導入・基礎科目）

1年次には、共通教育科目のほかに、専門科目が履修できます。人文科学への関心を深める導入科目「人文科学通論」や各種概論などの科目です。

2年次～4年次

2年次以降は、専門科目を履修

専門科目（基礎科目、基幹科目、発展科目など）

各コースの基礎科目、他コースの専門外の学生にも門戸を開いた基礎的である基幹科目、専門性が高い発展科目などを2～4年次に履修します。

広域履修プログラム

コースの専門科目のほかに、人文学部の多彩な科目を横断的に履修することによって、より幅広い学問理解を促すプログラムです。キャリア形成を視野に入れ、6つのプログラムが設定されています。

4年次

卒業論文（探究科目）

学修の集大成として研究指導を受けつつ論文を執筆します。



哲学・芸術論コース

文献を読んだり、伝統芸能のリサーチをしたり、地域を舞台に飛び回ってみたり。古今東西 縦横無尽。「哲学」と「芸術」をテーマとした「自由度の高い学び」と「根源的な問題の探究」を特色とするコースです。

哲学・思想論

世界、社会、人間、知識、私、心、そして愛……当たり前で決まりきったものだと思い込んでいた事柄について、根っこのところから考えてみる。また、さまざまな角度から考えてみる。本コースでの、「哲学」をテーマとする学びの特徴は、この一言に尽きます。哲学するとは、つまりそういうことなのです。しかし、徒手空拳でできることではありません。古今東西の思想やさまざまな学問的探究の方法に関する幅広い知見と、ものごとを明晰に考えてわかりやすく表現する技能を、地道に体得しながら、徐々に進めるべきことです。そのために実際、ここでは多様な研究ジャンルに接し、テクニカルな思考の訓練に参加することができるようなカリキュラムが組まれています。

意識的に視野を広げること、思考と表現の技能を磨くことも、けっして楽ではありません。けれども、これらをしっかりやった人は常識や権威に左右されることなく、不公正や不合理、あるいは浅慮を鋭く指摘し、有望な進路を模索できる人、ひとこと言えば、強靱な批判力を備えた人になっているはずです。強靱な批判力は、それを持つ人にとっても、その周囲の人びとにとっても一つの大きな支えになることでしょう。

芸術コミュニケーション

① 芸術はコミュニケーション！

「芸術」は、新しい感性でメッセージを発信する芸術家たちと私たちのコミュニケーションメディアであり、多様な価値観や見方、理解が交わる創造の場です。

② キーワードは〈アトリテラシー〉

音声言語によるコミュニケーションに言語運用スキルが不可欠のように、芸術コミュニケーションには、感性に依拠する「芸術言語」や身体感覚に依存する「身体言語」の運用スキル、〈アトリテラシー〉を学ばねばなりません。このアトリテラシーを獲得していくなかで、多様な芸術言語や身体言語を理解できるようになり、芸術的感性は鍛えられ、芸術家との双方向コミュニケーションに参加できる素養が形成されるのです。アトリテラシーの基礎を身につけた、地域の芸術活動を推進する人材を養成することが目標です。

③ 〈ワークショップ〉を核としたカリキュラム

アトリテラシーの基礎獲得のために、ミュージック系・パフォーミングアーツ系・ヴィジュアルアーツ系における体験型学習ワークショップを中心に、現在進行形の芸術活動のフィールドワークも盛り込んだ実践的なカリキュラムが構築されています。

文化情報論・社会学コース

現代の社会における諸課題について、科学的な視点から実証的に解き明かし、解決への手がかりを、実践的な研究活動を通して考察していきます。コースの複数の研究室は、その専門性によって大きく二つの領域に分かれています。

文化情報論

文化情報領域の各研究室では、今まさに進行中の社会や文化のできごとをテーマとして、アクティブな研究活動を志向します。認知情報学や消費社会・文化研究、情報コミュニケーション学といった複数の学問分野をクロスオーバーしながらも「情報」という共通の切り口を軸にしたテーマにアプローチします。また、実社会での情報リテラシーに直結した実践的な実習や演習を通して、社会に幅広く通用する「情報を活用する力」を高めることを教育の目標とします。

社会学

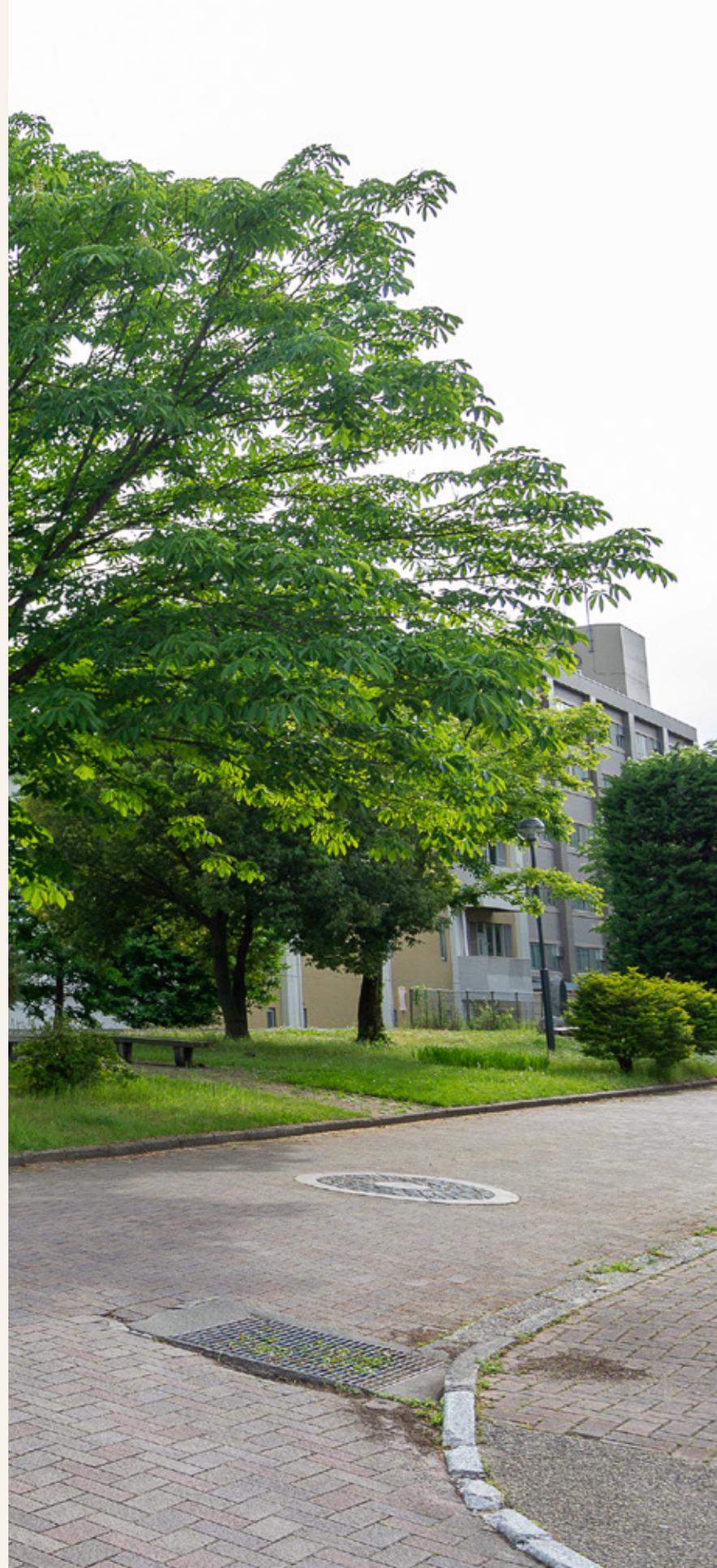
社会学領域の各研究室では、社会学の基礎的な理論と経験社会学の分析手法についての講義・演習・実習を組み合わせた体系的なカリキュラムを通して、地に足をつけた社会学的認識の方法を身につけます。とくに長野県内および周辺地域における調査を体験する実習では、地域社会の実情と課題を直接に体験・実感し、知識を実践へと結びつける能力を涵養することができます。身につけた社会調査能力を客観的に保証するために、社会調査士の資格取得を推奨しています。

心理学・社会心理学コース

“心”とは何か？ このシンプルな問いに対する私たちの考察は、紀元前ギリシャの哲学者にまでさかのぼることができると言われています。では、現代の心理学は、この問いに対してどのように回答しようとするのでしょうか。

心理学

歴史的には19世紀末に、研究方法として自然科学的方法(実験)を採用したところから、現代心理学がスタートしたと考えられています。その特色は、それ以前の心理学が思弁的、主観的であったことと対照的に、科学としての客観性や実証性を重視したことにあります。すなわち、現代心理学ではさまざまな心理学的事象について実験や調査などを行ってデータを取得し、それらを解析して考察を行い、最終的な結論を導くという一連の作業によってさまざまな問題を科学的に解決しようとする態度(サイコロジカルマインド)を採ります。この態度を専門課程の3年間を通じて実践的に身につけます。



社会心理学

社会心理学は、社会的存在としての人間について実証的に分析し、それらの結果に基づき理論的考察や法則性の発見を目指す学問です。自ら研究を計画し、データを収集・解析し、論文を作成する実証研究を実際に推進できる力を育成することを主要な教育目標に掲げています。カリキュラムでは実験実習が重視されます。実験実習を通して社会心理学の基本知識を「生きた技術」とすることを目指します。

社会心理学は、人びとが日常的に経験するありふれた社会現象を新たな観点から問い直す科学であり、「自明とされる事柄に対し、深くその根拠を問い直し新たな認識を構築できる思索力」を育成します。また実験依頼を行うなかで、大学生や地域の人びとと適切にコミュニケーションすることが必須となります。これにより、「他者の考えを明晰に理解し、自己の主張を的確に表現できる高度なコミュニケーションリテラシー」が実践的に高められます。

歴史学コース

歴史学コースでは、人びとの過去や時間に関する意識を考える学問＝歴史学を学びます。歴史学は、人類最古の学問の一つであると同時に、常にもっとも新しい「現在」との対話を重視する学問です。このコースでは、そうした歴史学的方法論的な基礎を身につけることを目的としています。加えて多様な社会・文化を持つ地域の歴史についても幅広く勉強することを目的として、「日本史」「東洋史」「西洋史」の3つの概論を基礎に日本、アジア、そしてヨーロッパを中心として「日本近世史」「近現代史」「東洋史」「西洋史」の4つのゼミ・研究室による専門的な授業を組み合わせたカリキュラムを運営しています。

日本史（近世史・近現代史）

日本史領域のキーコンセプトは「考える歴史学」です。高校までの日本史は、ただ教科書を暗記するだけのものでしかありません。しかも、あれほど一生懸命暗記した日本史の知識は大学では通用しないのです。なぜなら鎌倉幕府の成立は1192年ではないし、江戸時代でもっとも有名な法令である「慶安御触書」は、実は後世の創作だったりするからです。すなわち大学で学ぶ日本史学とは、主体的かつ批判的に考え、自ら発見するものです。日本史領域では、過去の「日本」について学ぶことを通じて、現在の「日本」を相対化し、未来への展望を模索する研究を行なっています。歴史的には「日本」という枠組みは自明ではなく、国境を越えた交流や諸地域固有の文化も存在します。「日本」を越える思考と、内に諸地域社会の個性を考察する態度が必須となります。

日本史領域のカリキュラムは、演習や講義を通じて、日本史に関する素養を獲得できるように構成されています。皆さんも信州大学人文学部で、自分の頭で考える、学問としての日本史学に触れてみませんか。



東洋史

東洋史学研究室は、主にアジア地域の、あるいはアジア地域にかかわる歴史的事象について、従来の学術的な研究成果を駆使するとともに、多種多様な言語・素材からなる史料を自ら探し出して、科学的・実証的な観点から分析を加えることのできる人を育成することを目的としています。このプロセスを経て、現代社会を生きるうえで必須の情報分析・処理能力を身につけることが期待されます。

本研究室が取り扱う東洋史学を学ぶことは、第一義には、アジア地域の過去と現在を知ることです。しかし、学問的な訓練を受けるなかで習得される技能は、過去だけではなく、今そこにある現実を読み解くためにも使われるべきです。歴史学は単に過去の事実を明らかにするだけのものではありません。現状分析も視野に入れた東洋史学を学ぶことを通じて、現実を冷静に見据え、賢く生きる術が身につけられることでしょう。

東洋史学という学問領域の中には、おおむね東アジア・北東アジア・中央アジア・東南アジア・南アジア・西アジアの地理区分があり、それぞれの地域の歴史的展開についての研究が行われています。そして、その連環も決して忘れてはなりません。アジアには交易・文化交流・社会の中の衝突と受容の歴史があります。背景の広さ・多様性とつながりを意識することが東洋史学の醍醐味でもあります。

西洋史

皆さんは西洋が好きでしょうか？ 嫌いでしょうか？ 西洋を遠く感じるでしょうか？ 近く感じるでしょうか？ 西洋は、好きでも嫌いでも、私たちとは無関係ではありえない場所です。遠くて近い所です。私たちの国の政治、経済、そのほかの制度から、果ては今着ている衣類に至るまで、それらの基礎は西洋から来ています。従って西洋史を学ぶということは、遠くの国の歴史を知ることであると同時に、私たちの社会の土台を理解することでもあります。遠い昔に遠い国の人が記した史料の中に、あなたは自分の言葉を見つけるでしょう。西洋史分野の教員は、そのための読み解き、まとめ、発表、討論を指導します。最終的には、そのような努力の成果を、卒業論文という形で提出してもらおうことになります。

比較言語文化コース

中国・ドイツ・フランスの言語文化、比較文学、西洋古典文学の研究領域を根幹とし、連携して研究・教育にあたります。外国語能力と異文化に対する受容力・批判力を培い、国際社会で活躍できる人材を育成します。

比較文学

国際的な視座に立ち、日本近代文学を西洋、特にフランスの文学と比較しながら研究します。例えば、夭折したラディゲの遺作『ドルジェル伯の舞踏会』が、日本の文学界にどれほどの衝撃を与えたか——なんてことを考えてみるのも面白そう。フランス人の日本観について調べたり、日本人のバリ体験の実態を探ったり、と、いろんな研究が可能です。1年生のときからフランス語をしっかりと勉強しておきましょう。

西洋古典学

西洋古典文学を原典に基づき研究します。例えば、ホメロスの『イーリアス』やプラトンの『饗宴』を古典ギリシア語で、オウィディウスの『変身物語』やカエサル『ガリア戦記』をラテン語で読みます。そのためには英語やフランス語、ドイツ語で書かれた辞書、文法書、注釈書、研究書も読むことになります。1年生のときから上記の西洋の古典語や外国語をしっかりと勉強しておきましょう。

フランス文学

フランス文学やフランス文化事情を原典に基づき研究します。長い歴史と伝統を誇る国フランスについて、その言語と文化の諸相を学び、豊かな教養とすぐれた国際感覚を身につけていきます。美しく論理的で明晰なフランス語を学ぶことは、広く世界のフランス語圏の諸国にも目を向けることでもあります。1年生のときからフランス語をしっかりと勉強しておきましょう。



ドイツ語学

ドイツ語圏における人と言語文化の営みを中心に、その変容の歴史、国際化時代におけるドイツ語の社会的な位置づけ、言語そのものの役割について学んでいきます。思考は言葉に、言葉は行動に——ゲルマン民族の大移動の時代から、国家という枠組みの形成、そして再び人びとがその国境を越えて社会経済活動を行う現代に至るまで、言葉はどのように使用され、社会的な役割を果たしてきたのか。ドイツ語を学び、異文化への理解を深めていきましょう。

ドイツ文学

ドイツ語圏の文化や文学は皆さんにとって身近なものではないかもしれませんが。実際に学び始めてみても、すぐには「わかった」とはならないでしょう。しかし、だからこそ意味があるのです。時代も言葉も異にする他者を理解するためには相応の訓練を要します。しかし多様化・グローバル化が進む現代において、異なる背景を持つ他者を理解する「構え」を身につけ、今持っているものとは別のフィルターを通して世界を眺めることができれば、それは素敵なことだと思いますか？

中国語学

漢字は我々日本人にとってなじみ深いものですが、もともとは「漢民族の文字」であり、音韻も文法もまったく異なる言語＝中国語の記号体系です。まずは初修外国語の中国語の授業を通じて、日本語との違いをしっかりと認識しましょう。人文学部専門授業では現代中国語の小説や記事を読み込むトレーニングなどを重ね、中国語の言語文化に対する理解を深めることを目指します。

中国文学

中国文学の対象は、最古の詩集『詩経』からノーベル賞を受賞した高行健や莫言の作品まで、長い歴史の中で幅広いジャンルに広がっています。指導教員の主な研究対象は中近世の戯曲小説にかかわる諸問題ですが、学生の皆さんはそれに限定される必要はありません。中国語の読解力を基礎として、自分の関心を専門的に発展させながら、調べる・考える・伝える力を養いましょう。

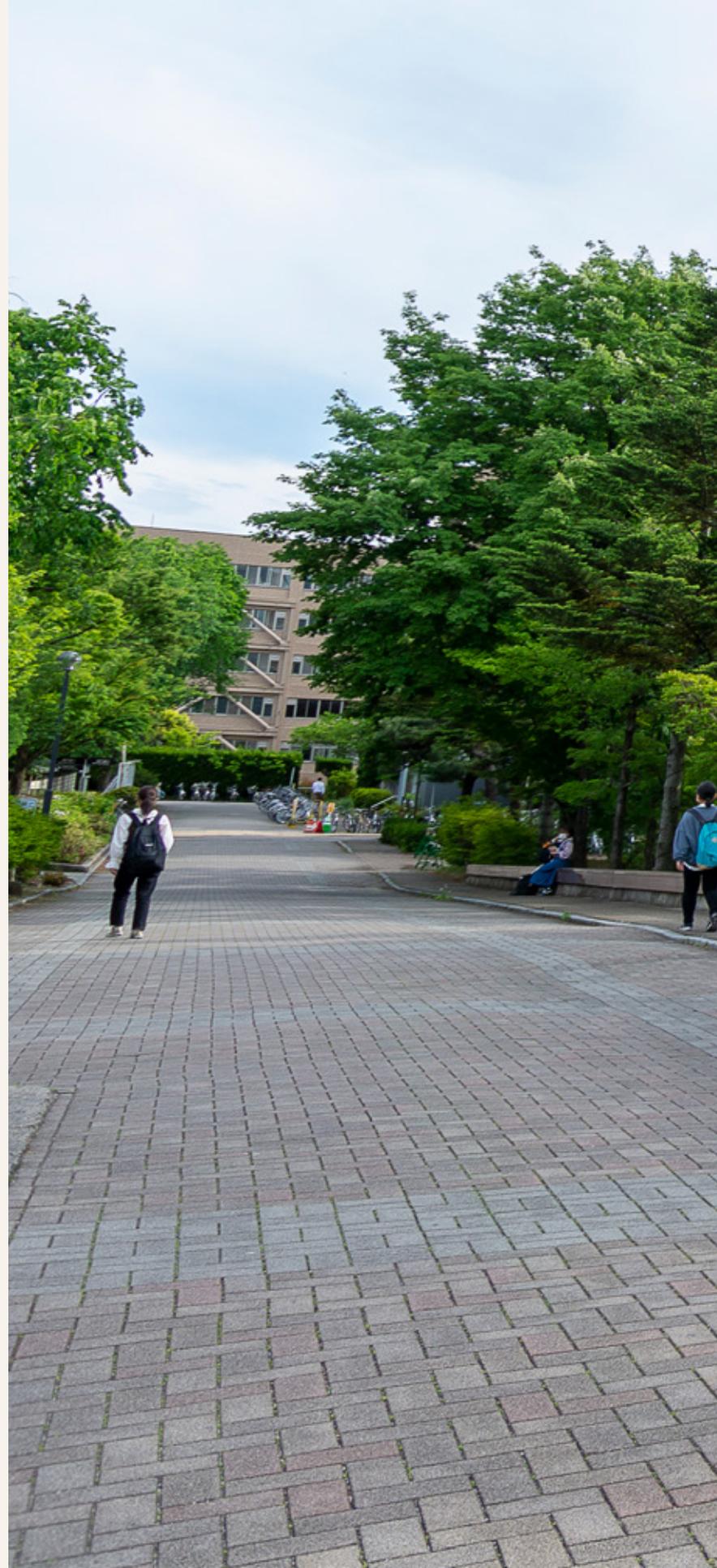
英米言語文化コース

英米言語文化コースは、イギリス、アメリカをはじめとする英語圏の言語や文化を広く学ぶことを通して、国際社会にふさわしい英語運用能力を養い、それを土台に異文化への理解を深め、思索力、構想力、開拓力、コミュニケーション・リテラシー、批判力を鍛えて、現代社会で活躍できる人材を育成します。

英語学／英米文学

英米言語文化コースでは、英語学、英米文学、英米映画研究など、英米言語文化に関連する幅広い研究領域が展開されています。本コースに所属する学生は、自らが所属する研究室において専門知識を深めると同時に、コース全体で展開されている隣接分野を学ぶことでより多角的に英米言語文化について捉えることを目指します。

- ①英語の史的変化、語彙論、意味論、英語の伝わる言語学的仕組み、英語と社会とのかかわりなどについて学び、英語をめぐる数々の謎を発見し、各人が調査・分析を行います。
- ②英米の文学、映画を中心に数多くの作品に触れることで芸術「作品」をより深く観賞する力を養うとともに、「テキスト」として精緻に分析し、批判的に読み解く力を培います。
- ③取り扱う対象にかかわらず、分析をもとに自分の考えを日本語および英語で論理的に表現する力も鍛えていきます。
- ④大学での学びの集大成となる卒業論文では、教員の指導のもと、上記の方法論を用いて先人の英知を批判的に継承し、大学で身につけた力を具体的な形で示します。



日本語文化コース

日本語文化コースでは、日本語による言語活動全般、および日本語による文学活動全般を研究対象とし、従来の研究成果や知見を学びつつも、科学的で独自の視点に立ち対象を追究できる人を育成することを目指しています。当コースにおいて特に重視する教育目標は、日本文学・日本語学・日本語教育学の幅広い知識・研究方法を学ぶだけでなく、それらに基づいて、自ら研究を計画し、データの調査・収集・解析を通じて、卒業論文を作成する力を身につけることです。このことによって、古代から現代まで、さまざまな時代の日本語や、それらの日本語による言語テキストや文学テキストというまでもなく、日本語そのものをも客観的な観察対象として分析する力を養い、実際の諸問題の問題解決にも理知的に取り組むことのできるスタンスや能力を伸ばしたいと考えています。

また、日本社会を列島という閉じた空間として捉えるのではなく、東アジア世界における日本、また国際社会における日本という地政学的な視点も重視し、それらの関係性の中で、日本語や日本語テキスト（含日本文学テキスト）を捉えるという大きな視野の獲得も重要と考えています。

日本語学／日本文学／日本語教育学

日本語文化コースのカリキュラムの第一の特色は、日本語学、日本文学、日本語教育学という日本語文化に関する幅広い研究領域の科目が用意されていることです。学生は、これらの研究領域から中心とする研究室を決め、演習科目や特論科目を通じて段階的に研究方法を学ぶと同時に、コース全体で展開されている幅広い隣接分野の学問を学ぶことができます。具体的には、2年次、3年次ともに「基幹演習」「発展演習」において個別具体的な問題を扱い、4年次には、それまでの学びを発展させ、自ら選んだ研究テーマに取り組み、卒業論文を完成させます。これらの演習や論文作成を通して、日本語学、日本文学、日本語教育学、いずれかの基本知識を、隣接領域の知識とともに実際に応用できる技術として身につけます。

また、当コースのもう一つの特色は、中学・高校の国語教員免許取得に対応していることです。さらに日本語教員養成課程にも対応しています。



信大人文学部から海外へ

信州大学では現在、世界各国38カ国・161の大学（2022年3月現在）との間に学術交流協定が結ばれています。

こうした大学に交換留学生として学生を派遣する制度に加え、海外の大学で修得した単位を卒業に必要な単位に読み替える制度など、学生の留学を支援する体制を整えて多くの学生を海外に送り出してきました。2021年度は4名の人文学部生が交換留学生としてドイツ、イギリス、アメリカで学んでいます。

また人文学部では独自に、英オクスフォードや独レーゲンスブルク、あるいは中国の北京や上海などへのグループ型による短期留学、英語・独語・仏語・韓国語・中国語などで語り合う外国語サロン、内外の講師を招き講演や質疑応答を行う多文化交流サロンといった、さまざまな国際交流関係の企画も実施しています。

海外から信大人文学部へ

信州大学では、海外の協定校からの交換留学生のほか、さまざまな目的を持った留学生が学部や大学院で学んでいます。2022年度人文学部では韓国、中国、アルゼンチン、ドイツ、ベルギーなどからの留学生11名（大学院生と交換留学生を含む）が在籍しています。

留学生の存在は人文学部の学生にとって大変身近なもので、お互いに多くの知識や刺激を与え合いながら、多様な価値観を理解し、広い視野で物事を考える豊かな国際感覚を身につけています。

INTERVIEW WITH PROFESSORS

人文学部教員インタビュー

北村 明子 KITAMURA, Akiko

人文学部 哲学・芸術論コース 教授



© Hiroyasu Daido

舞踊を中心とする身体論・パフォーマンス論の研究。2021年から現職。2011～14年、インドネシアとの国際共同制作 To Belong projectは東京、茅野、神戸、ジャカルタ、ソロ、シンガポールで上演し、第7回日本ダンスフォーラム賞2013受賞。2013～14年度信州大学文化庁事業の総合プロデュースを担当。2015年ACC個人助成日米芸術交流プログラムグランティスト。2015～2017年、アジア国際共同制作プロジェクト第2弾 Cross Transit projectを松本、東京、ブノンペンにて発表。2017年、ソロ作品 TranSensesをニューヨーク、モンリオールにて発表。
研究活動 website www.akikokitamura.com

身体と身体のコミュニケーションから創られるダンス 伝えることの難しさから自分を学んでほしい

インタビュー：岡 亜衣・石田 愛（大学院生／インタビュー当時）

芸術表現は人間の精神や 問題意識を反映するもの

——先生がダンスの道に進んだきっかけはなんですか？

始まりは、幼少期のバレエの習い事なんだけど、ダンスに本気で向き合い始めたのは高校時代。フレッド・アステアとかジーン・ケリーとかが出演しているハリウッドのミュージカル映画をたくさん見ていて、振付家やダンサーのこだわりのスタイルや動きからにじみ出てくる個性や、肉体とともに見る者を釘づけにするような強い意志が感じられてぐいぐいと惹かれていったの。

——ミュージカルが入り口だったんですね？！

先生のダンスはちょっと方向性が違う気がしますが……

そうそう、最初はストリートダンス、ジャズダンスをやっていたのだけど、私が大学に入ったころ、世界各国の最先端のダンスがたくさん来日していた時期だったこともあり影響を受けたんだよね。既成のダンスの動きを超えた、訳のわからない身体表現を浴びるように鑑賞しているうちに、最初は「なんだろうこれは？」という疑問ばかりだったのが、その違和感がどこからくるのか考えたり、調べてたりしていくうちに、海外の舞台芸術とその背景である社会や土地の生活文化、政治や信仰、経済にも興味を向けるようになったり、視野がどんどん広がっていった。ダンスがいろいろな知識を広げていく窓になって今に至るかな。

——ダンスを考えることで世界の知識が広がるというのは、なんだか夢のようですね。

ダンスのみならず、芸術表現はその時代時代の人間の精神や問題意識を反映するものだから、この動きが面白いなあ、とか、なんだかわからないけど引かかるなあと考えているうちに、驚くほど豊かな人びとの考え、クリエイターの思考を知ることができるものなんだよね。私の場合は、ダンスを通して人間の身体が背負うさまざまな現象の奥深さ、コミュニケーションの複雑さ、そして人間の身体に投げかけられていく視座の多様さを知ることなんだ。

——先生がされている研究ってどんな内容なのですか？

各国の伝統的なものから現代的表現の舞踊まで、踊りにかかわるあらゆることだけど……たとえば、学生とのフィールドワーク、長野県の儀礼・神楽（かぐら）の調査では、普段踊らないような学生も神楽の舞に実際に挑戦したりしているの。伝統的な身体技法が現代に脈々と伝承される様相を自身の身をもって体験しながら、儀礼全体やその土地の日々の生活、身体の動きに込められた祈りについて共同体の人びとにお話を聞いたりするときは、何百年、何千年も昔の思考を時空を超えて身体でダイレクトに受け取っているような感覚になり、ゾクゾクする瞬間。私の実践研究である舞台創作は現代の舞踊だけれども、それは決して伝統的な身体技法と、まったく異なるものではないと思ってるんだよね。

感じたことに対して 新しい言葉や思考回路を獲得していく

——現役の振付家である先生が大学でされている授業はどのようなものですか？ 学生はみんなダンサー志望なんですか？

ほとんどが「ダンサーになりたい！」という人ではありません。授業では実際のダンス作品を見てもらって、振付家の理論を研究したりします。たとえば現代の振付家の中には、有名なクラシックバレエの『白鳥の湖』を現代版にアレンジして、ダンサーをスキンヘッドにして、がにまたのぶかっような姿勢で歩かせちゃうなんていう人もいます。最初は見たことがないジャンルのせいか、見方にとまどう学生も多いみたい。でもどういう意図で作品が創られているかを読みといていくと、今まで知らなかった美しさを発見するだけでは終わらずに、いろいろなものが見えてくると思うよ。

——芸術への鑑賞眼を高める、みたいなことですか？

何かを見て面白かった、つまらなかっただけで終わってしまうのはもったいない。自分の感じたことに対して、新しい言葉や、思考回路を獲得していくと、芸術作品の見方自体も変わってくる。自分の脳の中にある白地図に次々と道を書き込んでいくような作業をする授業ともいえるかな。そうやって「自分マップ」みたいなものをつくってほしいな、と思いますね。

KITAMURA, Akiko

—それじゃあ学生は踊るわけではないんですね？

踊る授業もありますよ。といってもダンス経験のない人がほとんどなので、それをどう踊ってもらうか、というのが毎年の私の課題であり楽しみなんです。ジャンプをしたり、音楽のリズムにのっていないと、ダンスじゃないと思う人もいれば、街中で人が歩くだけの姿にダンスを見出す人もいます。つまり、ダンスってなんだらう？という疑問を持って、それぞれのアプローチで作品をつくろう、という授業をするの。

—なるほど。でも先生は実際に舞台作品をつくっているんですね。それと授業とどんな接点をもっているんですか？

実際の舞台作品って、ダンサーが踊れば済むかということ、そうではないんだよね。劇場、舞台美術、音楽、照明、衣装、振り付けとそれぞれのセクションで共同作業をしていくんだけど、そこでかかわる人すべてに、いかに自分の考え



を的確に伝えるかが作品を左右する。最初は文章をつくって、それに基づいて話し合いをするんだけど、時には絵や写真、音楽を使ったり、読んだ本から引用したり、身ぶり手ぶりで踊ってみせたりすることだってある。頭の中にある「自分マップ」から生まれる「伝えたいこと」を、人がわかるようにアピールしなくちゃならない。何かを創作するって、あらゆる伝達ツールを使ったコミュニケーションの集積なの。大学では机上での勉強が多いけど、この授業では、自分の考えを伝えるために、実際に身体を動かして表現しながら、他者と苦しいまでのコミュニケーションをとってもらいます。「思っていることを伝達するのは意外とむずかしい」と感じながら、独自の表現方法を見出して、最後の「ダンスづくり」という地点にたどりつくわけ。コミュニケーションの技術を実践的に身につけていく授業とも言えると思うよ。

—ダンスをつくる、といっても、身体をリズムに合わせて動かすという運動系の要素ばかりじゃなくて、もっと個人の意識や表現力を試される深いものなんですね。

そう、そして、生身の身体が生きてきた地域性や個性、外部とのつながり、つまり、人間を取り巻く過去と現在進行形をつなぐあらゆる事象について考えていくこと。ダンスを知ること、経験すること、考えること、これは人間の身体の魅力、未来に向けて現在の私たちのあり方を、実践的な表現行為とともに考えることでもあるんです。

—壮大で大変そうだけど達成感がある学びですね。今日はどうもありがとうございました。

澁谷 豊

SHIBUYA, Yutaka

人文学部 比較言語文化コース 教授



1968年に千葉県で生まれ、東京都中野区で青春を過ごす。早稲田大学第一文学部卒業。1995年から8年間のパリ滞在を経て、2006年10月、信州大学人文学部に着任。パリ第四大学文学博士。著書に『La Réception de Rimbaud au Japon.』(1907-1956)、『Atelier National de Reproduction des Thèses.』、訳書にエマニュエル・ボーヴ「ぼくのとみだち」「きみのいもうと」など。

自由で少人数制。少し矛盾しているけど、この人文学部では成り立つんですよ。比較文学はまさしくそう。

インタビューー：松山剛士・丘本業の香(3年/インタビュー当時)

比較文学は国境を二重にぼかしていける

比較文学って聞いたことがありますか。聞き慣れない言葉でしょう。

—たとえば日本の作家と海外の作家の作品を、それぞれの国の社会や文化の特徴を意識しながら比較したり、そんな感じですか。

そのとおり。一つの国の文学っていろんなものとかかわっていますよね。国境のむこうには別の文学があるし、国境の内側にも音楽や絵画とか、文学とは別のさまざまなジャンルがある。それらのかかわりを研究しようというのが比較文学です。

—なぜ比較文学研究を始めたのですか。

もともとはフランス文学を勉強していたんです。そしてパリに留学した。振り返るとね、ルーマニア人やアルジェリア人や、いろんな連中とパリでつき合うんですよ。それが当たり前の風景ね。そこに自分もいた。そこからフランスの文学を考えると、「外部」を抜きにすることは出来なくなっていたんです。だから自然と比較文学に近づいていった。僕はフランス文化とほかの文化とのかかわりが気になったんです。外部とのかかわりにこそ、僕は間違いなく興味を持っていた。

—留学してはっきりと見えたことですね。

まあ、そうですね。で、逆に日本に戻ってくると、今度は日本の文学とほかの国々の文学のかかわりも気になってくる。そして比較文学の研究者になった。

——今、先生がとくに関心をもっていることは何ですか？

日本の近代知識人がたくさんフランスに行っていますよね。金子光晴とか永井荷風とか、藤田嗣治とか。そんな人たちがフランスでどんなふうに住んだか、そしてその体験が彼らの作品にどんな影響を与えたかを研究しています。もう一つはエマニュエル・ボーヴという作家。フランス国籍の作家なんですが、ロシアからの移民の子なんですね。フランスで生まれたからフランス人なんだけど、その人の文学って、やっぱり親の文化を背負っているし、もちろん本人のフランスでの辛い経験も影を落としています。ボーヴというのも本名ではないんです。本当はボボヴニコフっていうんですね。そのロシア風の名前のせいで第一次世界大戦中にはスパイと間違えられて投獄されたりする。この人が僕はひたすら好き。

——一つの国の中にも、いろいろな経験が混じり合っているということでしょうか。少しづれますけど、同じ国の中の地域ごとの違いも気になりますよね。同じ国とは思えなかったり……。

そうですね。国というのは国境に囲まれた範

囲なのだろうけれど、その国境はたぶん二重にぼかしていきますよね。たとえばフランスとスペインの密接な関係を調べることによって、あるいは国境の内部の一枚岩ではない状態を明らかにすることで、フランス全体を取り囲んでいる国境の確かさというのは薄らいでいく。つまり、その人工性がばれてくる。今、メリメの『カルメン』を授業で取り上げているんですが、あれって誰もが胸ちぎられる男女の悲劇のようっていて、実はマイノリティ同士の特殊なドラマでもあるんですよ。主人公の男性はバスク地方の出身だし、女性はジプシー。あれはスペイン人一般の悲劇を描いたフランス文学ではありません。何にしろ調べてみると国境はほつれていくんですよ。ところで、あなたは何に興味があるの。

——映画や写真です。作品を比べたり、その良し悪しを語ることはするんですが、なかなか作家名やタイトルといった固有名が入ってこないですね。

もちろん作品あればこそなんだけど、やはり作家名ぐらい覚えないとね。僕は評伝が好きなんです。ほかに還元し得ないその人の特殊性がどうにも気になって仕方ない。

自分の好きなことに会うために 授業や教員を活用してほしい

——先生の講座で現代文学を研究することはできますか。

できます。でも、一つの小説を集中的にというのは違うかな。複数のものをつなぐ、境界をまたいでみるのが比較文学の立場なので。

——つまり、新しくてもよい。

そう。

——面白い研究分野ですね。比較文学という専攻分野がある大学自体、そんなに多くないと聞いたことがあるのですが、さらに踏み込んで、比較文学を松本、信州で学ぶことの意義や魅力って何でしょうか。

たとえばね、日仏の文化比較をすることになると、日本的なもの、フランス的なものといった単純な話になりがちでしょ。日本はもたれ合いの文化で、フランスは自立した個人の文化だとか、面白くないですよ。そうならないためには別の視点、たとえば同じ日本といっても違うな、単純化してはいかん、といったローカルな視点を支える場所が必要。その意味で松本という街はほどよいかもしれませんね。

——国宝のお城があって、カフェや劇場、ギャラリーもあって、バランスがとれている。都会じゃないけど、田舎でもないなあ。密度がありますよね。

そう。でもそれって松本だけじゃないよね(笑)。より大切なのは、信州大学には比較文学の伝統があるということです。北欧神話などの

貴重な蔵書もあるし、何よりも自由な雰囲気があります。少人数制の教育だから懇切丁寧な指導なんだけど、押しつけではなくて、どんなことにもとことんつき合おうという感じ。学生はいろんな研究が可能です。比較文学の開かれ方はとてつもないですよ。学生のこだわりでいくらでも好きなことができるからね。卒論テーマについても教員から具体的な指示はしません。とにかく最初に熱い感動がほしいし、切実な探究心がほしい。簡単に言うと学生には自分の好きなことに会ってほしいですよ。そのために授業や教員をどんどん活用してほしい。自由で少人数制。少し矛盾しているけど、この人文学部では成り立つんですよ。比較文学はまさしくそう。

——学生に何を求めますか。

他人に多くは求めません(笑)。でも本当に好きなことを見つけ出して、それに取り組んでほしいです。いろんなことにほどこコメントする力よりも、突っ込んで見たり考えたりする力をつけてほしいですね。あとは元気で！ってところかな(笑)。

伊藤 盡 ITÔ, Tsukusu

人文学部 英米言語文化コース 教授



1965年に東京都で生まれる。1985年慶應義塾大学入学。1991～92年アイスランド政府奨学金給付アイスランド大学留学。2015年5月より信州大学人文学部教授。
 主 要 論 文：Agony of Agnostos Theos: Descriptions of Grendelas Nature Genius 『「ペーオウルフ」とその周辺 — 忍足欣四郎先生追悼論文集』(春風社/2009) 161-182; 「トールキンのファンタジー：創造力の源泉としての中世英語・中世北欧文学」 『探 求するファンタジー：神話からメアリー・ボビンズまで』(風間書房/2010) 181-225; 「北欧語から英語への借入語としての Troll」 『信州大学人文学部人文学論集』46 (2012) 69-83. などなど。

言語と文学の境界を扱う学問、 それが英語の文献学。

言語学は英語を医学的に解剖すること、 文献学はその人間を知ること

— 英語学ってどういう学問なんでしょう？

英語学には二つあります。一つは英語の言語学 (Linguistics)、もう一つは文献学 (Philology) です。

— その二つはどういったものなんですか？

もし英語という言語を人間に^{たと}喩えるならば、言語学は、英語を医学的に解剖することです。英語の皮膚組織を顕微鏡で見たり、眼球の動きを観察したり、耳の構造、内臓を細かく解明していく。一方、その人間がどこで生まれ、どういう本から影響を受けたのか、交友関係、昔ど

んな作文を書いたかを知る方法もあります。文献学とは、英語をそんな総合的なアプローチで知っていく学問です。

— 先生が文献学としての英語学に興味をもたれたきっかけは？

正直に言うと、僕は中学・高校のときの英文法の授業が嫌いだったんです。小学生のときに『赤毛のアン』に出会い、原書で読みたいと思いました。英文法は『赤毛のアン』を読むため、また英会話をするための道具でした。けれども、中学や高校の英文法って、そもそも「何のために」という問いかけがないまま、やたらと暗記を勧められるじゃないですか。英語は好きだったけど、英文法の授業が大切だとは思えなかった。あ、今は違いますよ。今なら英文法

が大事だってことはよくわかります。それを教えてますから (笑)。

— では、『赤毛のアン』がきっかけだった、と。

そうですね。でも、もっと大きな出会いもあったんですよ、高校のときに。トールキンの『指輪物語』が図書館の隅っこのところに眠っていたんです。赤い布製の本でね。それを手にとって……。

— はまっちゃった。

……とはならず、最初は挫折しました (笑)。僕は高校のときは、物理部にも所属する理系志望だったんです。友達の一人がアメリカから取り寄せたボードゲームをやったりして、そのうちRPGが僕らの間で流行しました。そこからですね。これって『指輪物語』の世界じゃないと気づいたわけです。一度は挫折した『指輪物語』の世界にどっぷりとはまり、最後は文系志望に変えてしまいました。

広い視野を確保することで 新しい扉が開かれる

— 大学では、すぐに英語学への道を決められたんですか？

いや、1年生の間はまだ専門が決まりません。決めあぐねて先輩などに相談すると、「お前、もともとスペンサーの『妖精の女王』なん

かに興味があったんじゃないのか。それならうち (慶應) には高宮利行先生がいるぞ」と教えられ、さっそく先生の研究室を訪ねました。

— すごい行動力ですね。

そのときに、もともと『赤毛のアン』に興味があったことなどを話しました。そうしたら、すでに先輩の一人が卒論で『赤毛のアン』を扱おうとしていると教えられ、「それならトールキンをやります」と言ったわけです。

— 専門を決めるって、偶然の要素もあるんですね。

そうなんです。信州大学の学生さんにもよく言ってることですが、1年生のときには、たとえ自分が勉強したい、これがやりたいと思っていることがあったとしても、いろいろなところに目を向けて、広い視野を確保することが大事ですね。そこから新しい扉が開かれるから、って。

— 大学時代は英語づけの毎日だったんですか？

ミュージシャンになるという夢があったものだから……。授業よりも音楽活動を優先している時間が長かったです。でも高宮先生の演習だけは欠かさず出ていました。厳しい演習でしたが、多くのことを学びました。卒論では「神話と言語」というタイトルで、哲学者カッシー

ITŌ, Tsukusu

ラーなどの著作も使いながら、言語的なものと神話世界とのつながりを考えました。

——優秀ですね。

いやいや、「中世英文学史」という授業があったのですが、その評価がBで……。それがすごく悔しかったものだから、単位は取れたけれども、4年生のときにもう一度受講しました。その授業では、後に僕の研究につながる最古の英文叙事詩『ベオールフ』やチャーサーの『カンタベリ物語』などが取り上げられていたんです。僕は自分でテキストの用語集 (Glossary) をつくって勉強しました。そのあたりからですね、文献学の面白さを強く認識するようになったのは。

——どういことですか？

つまり文献学とは、言ってしまうと文学と言語の境界にあるものです。特に『ベオールフ』などの中世英語文献を味わうためには、言語学的な知識が欠かせません。言語を深く知ること、初めてその文学の価値がわかるんです。

——現在へのつながりが確認できますね。ご専門のことをお聞きしたいのですが？

大きくは三つの専門を研究しています。一つ目は、中世英語 (文献) 学です。これはそのまま。二つ目は、中世北欧の文献学です。そして、

三つ目がトルキン研究。

——中世北欧の文献学というのは、ちょっと聞きなれないですね。

21世紀の今はまさにホットな分野です。アイスランドなどの北欧に伝わる写本資料、ルーン文字で書かれた碑文から北欧神話や中世の英国や北欧の文化や言語、歴史を探ることになります。18世紀によく知られることになったこれらの資料には、研究する素材がまだまだ山ほどあります。

——トルキン研究についてはどうでしょう。

オクスフォード大学の教授でもあった文献学者トルキンの研究です。先ほども紹介した最古の叙事詩『ベオールフ』についても、トルキンはほかを凌駕する成果を残しています。北欧の英雄ベオールフが、怪物グレンデルとその母親を退治し、デンマークに平和を取り戻す。ベオールフはスウェーデン南部の王になるが、火を吹く龍を倒して自分も死にいたる、といった内容です。以前には、デンマーク王家の歴史を伝える文献として理解され、そのファンタジーの要素は徹底的に無視されました。トルキンはそんな解釈をひっくり返し、この作品は怪物退治の物語だからこそ価値があるのだ、と論じて人びとの『ベオールフ』を見る目を変えました。

豊岡康史 TOYOOKA, Yasufumi

人文学部 歴史学コース 准教授



1980年生まれ、東京都出身。博士 (文学) の学位を東京大学で取得。専門は、海賊問題を含む中国の政治・経済・国際関係史。2014年から信州大学人文学部准教授。主な著書に『海賊からみた清朝』(藤原書店/2016)、共編著に『銀の流通と中国・東南アジア』(山川出版社/2019)がある。

疑問を持ったり考えたり、資料や本を読んで
さまざまな視点から考えてみたい。

インタビュー：東洋史分野学生

**欧米でも日本でもないところは
全部、東洋**

——東洋史ってどんな学問なのですか？

日本の東洋史学は明治時代の社会のニーズに合わせて生まれた学問です。幕末に開国して、東アジアとかもっと先の方に出たいこうとするでしょう？ その時に出ていった先のことがわからないと困る、現地にはどんな社会が広がっているのか、どういう来歴ででき上がったのかということを知りたい。そういうニーズに応えるためにできたのが東洋史学です。そうすると「東洋」ってどこさという話になるんですけど、西洋、つまり欧米でも日本でもないところは全部ということになりますね。地球上の人口の6～7割くらいをカバーすることになります。そ

んな広い地域の古代から現代までを扱うわけですから、「これが東洋史学の正統な方法だ！」なんて話はできないわけです。いろんな地域の専門家が寄り集まっているのが東洋史学ですね。

——先生がなぜ東洋史に進んで、今の研究分野を始めたのか、その魅力みたいなものを教えてください。

うーん、べつに「東洋史」をやろうみたいのはなかったんですよ、最初は。中国の歴史の話は好きだったんですよ。『三国志』も読んだし、ゲームもやった。陳舜臣とか田中芳樹の中国史関係の小説とかが好きで、卒論のテーマ選ぶときに、とりあえず中国やろう、指導教員の先生が18～19世紀の中国内陸の白蓮教徒の乱をやってるから、同じ反乱をやろうか、くらの

気分でした。それで何かないかなと探していたら海賊がいたんですよ。これなら目立つぞ！と。それで大学院に行ったら、周りにはアラブの奴隷反乱とか、東南アジアの鉱山労働者のリクルートのやり方とか、ウズベキスタンの灌漑とかを研究している人がいたんですね。なるほど知らない話ばかりじゃないか、これは面白いな、「東洋史」って間口が広いんだなあと考えて、そのまま東洋史の人になりました。

——面白いですね！

あと、海賊の話で、当時の中国の行政文書を読んでいたんですけど、ずーっと海賊が捕まって処刑される話しか書いてないんですよ。つまんねえなあと考えていたんですけど、あるとき「ベトナムから海賊が来てます」という報告書が出てくるんです。それを見た当時の皇帝が「そんなわけあるか！」と言って報告者を左遷しました。そしたら、次から報告書に「海賊は外国と関係ありません」とか書いてある。で、その数カ月後に、実際にベトナムから来た海賊が捕まります。それでも皇帝陛下は「ベトナムの王様は関係ない。遺憾の意とか伝えてもしょうがない」と言うんですよ。なんでかって言うと、ベトナムと戦争したくなかったからなんですけど。それから「言えること」「言えないこと」ってなんだろうと考えたりするようになり

ました。「これ、黙っとこ」みたいの、みんなもあるでしょ？人間は単に自分のためにウソつくんじゃないんですよ。政治的に黙っておいたほうが良いこと、強調したほうが良いことってあるんです。そういうことって面白いなあと考えながら史料を読んで論文を書いたりしています。

「ここに書かれていることの根拠は？」と常に問い続ける

——東洋史をやられていると、研究する国の言語が必要になるんじゃないかと思えます。でも日本語で研究書が出ているのに、それじゃなく、自分で生を読む意義ってあるんですか？

これは言語の問題じゃなくて、歴史でもなんでも書いてあることは「この根拠は何？」って考えないといけないよという話なんですよ。日本語の研究書で「これこれこうですよ、これが当時は普通だったんですよ」と書いてあって、「ふーん、なるほど」と言ったらそこで終わりじゃないですか。もう研究なんてしないでいい。でも元の史料を見たら、「これは特殊な事例です」とか書いてあったりする。日本語の研究書がそれを見落とししていたりすることだってあるわけ。そういうのを現地の言葉で見ても、わかったりしたらうれしくないですか？「読め

る読めるぞ！」「だまされなかったぞ！」「めっちゃ細かいことだけど、このことは日本で自分しか知らないんだ」って。少なくとも変なネットの記事に引っかかったりしなくなりますよ。

人文学部の学問はすべて社会や人間の仕組みを考える

——私ははじめ文学系に進もうと思っていたんです。就職で英語を使いたいなと考えて。でも結局歴史を選んで、そのときに母親に「歴史に行って就職どうすんの？」みたいなことを言われたんです。貴重な大学生活で、あえて歴史、特に東洋史を学ぶ意義を先生は何だとお考えですか？

歴史を学ぶ意義ですか……。別に歴史に限らないんだけど、人文学部でやっている学問はすべて社会とか人間の仕組みを考えてるんですよ。何をやっても意義はあると思うんですけどねえ。その中で東洋史はよその国・地域の、今ではない時期の社会とか人間の仕組みを考える。しかも歴史は昔のことだから全部結果がわかっている、答え合わせができるんです。そのサンプルを使って、この人間ってなんでこんなことするんだろうな、なんでこんなこと言うんだろうなというのを考えるのは、とっても意味のあることだと思いますよ、我々には我々の

今の社会があって、それをみんなで構成してるわけでしょ？どうやったらこの社会は良くなるのかなとか、どうやったらうまくサボれるかな(笑)とか、そういうことを実際にやる前にトレーニングして社会に出ていくんだと思えば意義あると思いませんか？

——松本で東洋史をやるのって、物理的な制約がありませんか？

うーん、今はネットがあるからね。出版されている本ならだいたいなんでも調達できますよ。それに、本当に大事な史料は現地に行かないとないから、東京でも大阪でもわかりませんね。そもそもね、材料があるかどうかより、どんな材料がほしいかのほうが大事なんです。ちょっと頑張ればだいたいなんでも手に入る時代になったので、むしろ僕は皆さんが何を知りたいのかが知りたい。それがわかれば、じゃあこういうの読んでみたら？とか、こういうのがあるんだよという話ができます。僕は「これを勉強しなさい」みたいなことは言わないから、「こういうことを知りたいんだ」ということを教えてほしい。そうしたら、よっぽど高くない限り調達しますよ。それでみんなが勉強して、その内容を教えてくれたら僕の知識が増える(笑)。

速水香織 HAYAMI, Kaori

人文学部 日本語文化コース 准教授



皇學館大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。2013年10月より現職。日本近世文学、出版メディア研究を専門とする。著書に「近世前期江戸出版文化史」(文学通信/2020)、『假名草子集成』第67巻(共著、東京堂出版/2022)などがある。

文芸は時代の考え方や世相を映す鏡 江戸時代、文芸創出の基盤となった出版文化

インタビュアー：日本文学分野学生、菊池 聡

日本文学を志すきっかけ

—先生はなぜ日本文学を志したのですか？

中学1年生のとき、初めて触れた古典の文章が『竹取物語』だったのですが、同じ日本語で書かれていながら、まったく異質な文章だと感じて、ああ、こういう世界があるんだって思ったんですよね。「かぐや姫」の物語の、これが原典なんだって。古典の魅力に触れた、それが最初だったと思います。

大学進学するときも文学部を選択しました。しかし日本文学とは、それまで考えていたよりずっと大きな学問分野でした。実は私、日本文

学って、なんとなく国語の延長のようなイメージを持っていたんですね。しかし、高校までの「国語」とは大きく違うところがある。注釈や現代語訳が備わって、研究者がきれいに整えた本文を、内容をきちんと理解していくというのが高校での大切な学習内容だと思うんです。けど、大学では、研究が進んだ文献ばかりでなく、まだ誰も手をつけていないような文献を解読するところから始まる。最初、何これ？って戸惑ったんです。でも、この大学に入って初めて原典の解読に取り組んだ経験が自分の中では本当に大きくて、もっとこの世界を知りたいと思って大学院に進学しました。その延長線上に今があるんですね。だから、中学時代に国語で

学んだ古典が、結局は日本文学を専攻した原点になってるのかな、と思います。

江戸時代の出版文化

—ちなみになぜ近世文学、それも出版文化を専攻されたんですか？

最初は上代文学をやりたいって思ってたんです。それが大学2年生でプレゼミみたいな授業を選択するとき、先輩からこの授業面白いよって勧められて履修した授業の先生が近世文学のご専門で、その授業で読んだのが井原西鶴の浮世草子。木版本で奥付があり、版元名が印刷されています。そこで先生にこの出版元ってどういう人なんですか？って尋ねたら「調査されていなくてまだ判っていない」という返事がかえってきて。西鶴浮世草子は、近世文学の中では最も盛んに研究されている領域の一つなんです。ところが、その人の本を出版した版元がどういう人が判ってない。

でも、本というのは一般にニーズがあるから出版されるのであって、その本を作った版元のことをよくわからないのでは、出版物としての作品の本質に迫れないんじゃないかっていう風に考えたんですね。当時はそこまで言語化はできなかったんですけど(苦笑)。で、誰もやらないなら私がやる！と思って。本当に生意気でした(一同:笑)。そしてそれを卒論のテーマにして、今に至るという。先輩に面白いよって勧

められた授業の中で非常に大きな疑問点を見つけて、それを解明するために、今も勉強し続けているっていう状態ですね。近世の、特に印刷出版されて世の中に広まった本を対象にして、ずっと調査研究を続けているというところですよ。

—近世において、出版文化の発展はとても大きな現象だったと思うのですが、それがそこまで研究されていないという状態は今も変わらないのですか？

近世と一口に言っても260年以上続いた、近代に接続して現代に至る、非常に重要なポイントにもなる時代で、出版文化のあり方、出版文化の江戸時代における意義、また幕末から明治への変遷などは、現在は非常に盛んに調査研究されているテーマです。私としては、1600年代から1700年代半ばまでの、出版文化が発達し、版元が様々な作品を社会に送り出しながら活動の規模を拡大させていく時期に最も興味があります。

大学での学び

—文学研究について、もう少し教えて下さい。

先ほども少し触れましたが、高校では、教科書に載っているテキストを、指導者である先生

HAYAMI, Kaori

の指示に従って、古語辞典などで言葉の意味を確認しながら内容を理解していくことが、まずは重要になりますね。

しかし大学では、そもそも辞書の記述を信用していいのだろうか、というところから検討を行います。辞書とはいえ、人が作ったものですから、間違いであるとか、説明不足のところもあるかもしれない。だから言葉の意味を知るには、自分自身がその言葉の意味を、多くの文献の中で使用例を確認し、模索していかなければならないということになります。自分自身が既存のものを疑いながら対象を調査していくことが重要になってきますよね。

——先生から見て私たち学生はどのように見えますか？

信州大学人文学部の学生諸君は、よく勉強されてると思います。自分で文章を読んで、こういうところがこの文章を理解するために重要なんだ、という問題点を発見する力がとても高いと思っています。ただ、やっぱりゼミに入りたての2年生の最初のころに比べて、3年生になると成長したなとか、4年生になって卒論を書く段になると「あ、こんなことも知ってるんだ。春休みの間にいろんな本を読んだんだろうな」

と嬉しくなることもありますね。逆に言うと、私たち教員が授業で皆さんにお伝え出来るのは、その研究領域のごく一部のことにすぎませんから、それで満足するのではなく、自分で疑問点を見つけ、興味を持ったことに対して、どんどん図書館やデータベースを活用して調べてゆくなど、アクティヴに学ぶ姿勢を持ってほしいな、と願っています。

——高校生に一言。

人文学は、人間に関わることすべて人文学であると考えたら、非常に広い学問領域なんですね。人間活動そのものとか、社会的な営みであるとか、歴史的に残されてきた様々な文献などに、とにかく興味を持っていただきたいと思います。そして自分で勉強したいこと、知りたいことを見つけ、それについて自分自身が答えを見つけていこうという「知りたい、学びたい！」という姿勢を持っていただきたい、と願っています。

信州大学人文学部には、そういう方々のために、多くの専門領域をカバーする先生方がいらっしゃいます。意欲的な方々と、一緒に学んでいければ幸せだと思います。

ACADEMIC STAFF

人文学部 教育・研究スタッフ

哲学・芸術論コース

哲学・思想論



教授 | 篠原成彦

[言語哲学・心の哲学]

研究の基底にあるのは、適切な世界観とはどのようなものか、という根本的な問い。目下は、言語・心的現象・知識を、自然現象として説明するための方法に関する考察を通じて、自然主義的な世界理解の可能性を探っている。



教授 | 早坂俊廣

[中国哲学]

朱子学・陽明学といった中国近世思想を、中国的社会結合の特質に留意しつつ研究している。また、比較思想的な関心から徳倫理学に関する諸問題を考察している。



教授 | 護山真也

[仏教学・比較哲学]

インド仏教の研究を中心としながら、哲学と宗教のあいだにある事柄(輪廻の論証やさとの認識論など)について考察を行っている。また、知覚の比較哲学にも関心をもつ。



教授 | 三谷尚澄

[倫理学・西洋哲学]

カントとその現代的継承者たちの研究をベースに、価値・規範・美など、自然科学的記述の対象とはならないが、日常の実感のレベルでは「リアリティ」をもって成立している経験について、その成立構造を明示化してみせることを目指している。

芸術コミュニケーション



教授 | 金井直

[近現代美術史]

新古典主義、彫刻史、イタリア近現代美術史、日本近現代美術史について、またそれらが交差する領域について研究している。



教授 | 北村明子

[舞台芸術・舞踊・身体論]

コンテンポラリー・ダンスを中心とするパフォーマンス論の研究。ダンサー、振付家、演出家の視点から舞台芸術における“how to”を考える。

© Hiroyasu Daido



准教授 | 濱崎友絵

[音楽学]

音楽が社会や歴史との交渉の中でどのようにかたちづくられてゆくのか、そのプロセスに関心を寄せている。専門とする領域は、近現代のトルコの音楽。とくに音楽における近代化および西洋化の問題を中心に研究をおこなう。

文化情報論・社会学コース

文化情報論



教授 | 菊池 聡

[認知情報学]

人はなぜ不思議な出来事や科学的に怪しい主張を信じ込んでしまうのだろうか。その認知心理学的メカニズムを手がかりとして、実践的なクリティカルシンキング(批判的思考)の態度と技術について研究している。



教授 | 水原俊博

[消費社会・文化研究]

現代の多様な消費分野(ファッション、美容、情報、食観光など)における「マクドナルド化」「ディズニー化」「(ポスト・)ポストモダン」「地産地消」「地域ブランド」といった趨勢、傾向に対して、社会学、メディア論、記号論。人類学などの視点から関心を寄せている。



准教授 | 佐藤広英

[情報コミュニケーション学]

情報メディア(インターネット、テレビ、ゲーム、広告など)を媒介としたコミュニケーションの特徴や影響過程について、社会心理学的アプローチから研究を行っている。近年は、インターネット上におけるプライバシーの問題、ストレスが認知能力に与える影響を主な研究課題としている。

社会学



准教授 | 茅野恒秀

[環境社会学・サステナビリティ学]

社会学に立脚して、環境問題を中心とする社会問題の解明と解決過程に関する実証研究を行っている。とりわけ、地域に存する自然資源や文化資源を持続的に保全管理するためのマネジメント手法や、関係者の協働の形式に着目した「地域資源管理の社会技術」の体系化に取り組んでいる。



准教授 | 前田 豊

[階層意識論・数理社会学]

社会における人々の意識や態度の形成過程に注目し、所得などの経済的資源や学歴・職業などの社会的資源と意識・態度がどのように関わっているのか、について、主に社会調査データの統計解析および数理モデルの解析から実証・理論的にアプローチしている。

心理学・社会心理学コース

心理学



教授 | 今井 章

[実験心理学・心理生理学]

人が外界から刺激を選択的に取り入れる際にどのような心理的機制がはたらき、それに対してどのような生理的対件(ついけん)が認められるのか。このことに関わる心理学的諸問題に取り組んでいる。



教授 | 高瀬弘樹

[実験心理学・身体心理学]

複雑で多様な環境の中で、人間はいかに意味のある情報を知覚し行為を組織化しているかに関し、「人間-環境(他者を含む)」をマクロな協調システムとして捉える観点から、ダイナミカル・システム・アプローチを援用し実証的研究を進めている。



准教授 | 岡本卓也

[社会心理学・観光心理学]

集団所属の心理過程を中心に、地域への愛着が人々の行動に与える影響や「場所」に対する意識と定住/移動の関係について研究している。近年は、旅や巡礼も含めた地域移動へと対象を拡張、人と場所の相互作用について総合的に検討している。



准教授 | 松本 昇

[臨床心理学・記憶心理学]

なぜ精神疾患が生じ、維持されるのか、そのメカニズムを実験的な手法を用いて研究している。特に、うつ病やPTSDの記憶の異常に関する研究を行っている。また、それらのメカニズムに基づく効果的な治療法の開発を行っている。



助教 | 白井真理子

[感情心理学・精神生理学]

私たちはなぜ悲しくなるのか、悲しみの感情は私たちにとってどのような意味を持つのか、といったネガティブな感情、特に悲しみ感情の機能について研究を行っている。また、ネガティブ感情とポジティブ感情が混ざり合った混合感情についても興味を持ち研究を行っている。

社会心理学

比較文学



教授 | 野津 寛

[西洋古典学]

古代ギリシア演劇、特に紀元前5世紀の喜劇詩人アリストパネスの作品に関心を持っている。ヨーロッパ文学の起源をホメロスまでさかのぼり、近代文学における西洋古典文学の受容の歴史を教育・研究している。



教授 | 澁谷 豊

[比較文学]

近代日本文学と西洋文学の比較文学的研究。特に「近代日本におけるフランス文学受容」と「近代日本人作家の滞仏体験」に関心を持ち、現在、兩次大戦間のパリに滞在した日本人作家の足跡を調査している。また、フランス語圏の作家(エマニュエル・ボーヴなど)の翻訳紹介にも携わっている。

ドイツ語学・ドイツ文学



准教授 | 磯部美穂

[ドイツ語学]

テキスト言語学・認知言語学などの観点から、ドイツ語の造語法に関する研究を行っている。共時的な視点からだけでなく、通時的に言語現象を分析することで、より多元的にドイツ語のしくみを解明していくことを課題としている。



准教授 | 葛西敬之

[ドイツ文学]

近現代ドイツ語圏の文学、とりわけローベルト・ヴァルザー、ギュンター・グラスなどの作品を研究している。また、文化学の一つとしての文学が、文化的記憶として果たし得る役割についても関心を持っている。

中国語学・中国文学

教授 | 氏岡真士

[中国古典文学]

戯曲・小説に関わる諸問題を、主な研究テーマとする。たとえば「三国志演義」や「西遊記」に代表される、旧白話(中・近世の口語)小説の発展過程について、芸能や出版との関係に留意しながら考察を進めている。



教授 | 伊藤加奈子

[中国語学]

現代中国語の共通語における文法構造の考察をしている。現在は日中対照分析による中国語と日本語の複文の差異や、中国語の文成立に関わる副詞のあり方に関心を持っている。

フランス語学・フランス文学



教授 | 鎌田隆行

[フランス文学]

生成批評の立場から19世紀フランスの文学テキストに取り組んでいる。近年はバルザック『パリにおける田舎の偉人』や『セザール・ピロト』の生成資料を主なコーパスとし、自筆草稿や校正刷りなどの検証を進めてきた。メディア、支持体の問題を視野に入れて、文学作品の生成・流通・受容の関係を広く考察することを目指している。

歴史学コース

日本史



教授 | 山本英二

[日本近世史]

専門の時代は17~19世紀を中心とした日本近世-近代史。具体的な研究テーマは、江戸時代における偽文書や由緒書を通じてみた民衆意識の研究、および「慶安御触書」の成立に関する基礎的研究。



教授 | 大串潤児

[近現代史・日本近現代史]

主に研究している時代は戦後史、とくに占領期から1950年代の地域社会をアツカウ。具体的には長野県をフィールドに青年団運動や村政民主化運動、女子たちの運動を通して、戦後民衆思想史を研究している。

東洋史



准教授 | 豊岡康史

[中国近世・近代史]

現代の東アジアは、どのような歴史的な過程を経て形成されたのか、という点に関心を向けながら、18・19世紀の清朝中国をめぐる国際関係について研究している。香港・マカオ・台湾をふくむ中国東南沿海の歴史を主なフィールドとしている。

西洋史

准教授 | 佐藤真紀

[フランス近代史]

フランス革命期の社会を人的結合関係からみることで、大衆にとっての「革命」とは何であったのか、あるいは、ブルジョワジーにとっての「革命」とはどのようなものであったのかということを考える。

比較言語文化コース

英米言語文化コース

英語学



教授 | 伊藤 盡

[英語学・中世英語英文学]

中世初期イングランドにおいて英語話者と北欧語話者の間に見られた言語の融合過程を研究する。言語文化としての北欧神話や中世英雄叙事詩の文献学的研究、『ロード・オブ・ザ・リング』のエルフ語研究も行っている。



助教 | Ash Leigh Spreadbury

アッシュ・リー・スプレッドベリー

[英語学・言語学]

認知言語学・社会言語学の観点から英語の構文知識を研究している。構文が慣習として特定の社会的関係や状況を喚起するようになる過程に特に関心を持っている。常に変化し続ける我々の言語知識のあり方に迫っていきたい。

英米文学



教授 | 杉野 健太郎

[英語文学・文化]

フィッツジェラルド、ヘミングウェイなどの20世紀アメリカ小説や映画を中心に研究しており、また、批評理論ならびに英米文学・文化と英語の教育法にも関心を持っている。



教授 | 飯岡 詩朗

[英米映画研究]

1930～50年代のハリウッド映画を中心に、アメリカ映画を人種・エスニシティ・ジェンダーなどとの関わりの中で研究。またひろく映像・視覚に関わる文化研究、メディア・リテラシーにも関心を持っている。



助教 | 趙 泰昊

[中世英文学・中世英語学]

中世後期イングランドで書かれた文学作品に登場する「異教徒」の描写を分析しながら、宗教や人種によって区別される「他者」の表象伝統について研究している。また、フランスやイタリアなど同時代のヨーロッパ大陸からの文化的影響についても関心を持っている。

日本語文化コース

日本文学



教授 | 渡邊 匡一

[日本中世文学・宗教文化]

14～16世紀を主な研究対象にしている。寺社資料を用いて、地域における信仰や、日本における「知の体系」の把握を模索している。また、沖縄と日本の文化交渉の歴史を追い、「地域」の問題を探っている。



准教授 | 速水 香織

[日本近世文学]

17～18世紀に発展した出版文化と、それを基盤として成立した諸作品及び作者を研究対象にしている。出版書肆の活動のなかに作品を位置付け、作品創出・刊行の文化的な意味を明らかにしようとしている。

日本語学



教授 | 山田 健三

[日本語学]

日本語の歴史的研究。文献のみならず、方言も視野に入れ、言語変化一般に広く関心を持っているが、近年は特に辞書生活史、文法史、書記史についての研究を行っている。



講師 | 中澤 光平

[日本語音声学・音韻論]

琉球を含む現代の諸方言を対象とした主に音声、音韻についての記述および文献を含む音韻史の研究を行っている。現在の主な研究テーマは、音変化に基づいて方言間の歴史的な関係(系統関係)を明らかにすること。

日本語教育学



准教授 | 坂口 和寛

[日本語教育学]

日本語教師とその養成に関する研究を行っている。特に、日本語教師に必要な日本語分析技術と指導技術の特徴を探り、トレーニングを通じて教師の日本語能力向上に役立てることを目指している。

COLLEGE LIFE

人文学部学生の4年間



撮影のために短時間マスクを外しています。





1年 | 井上凜音

1年かけていろいろ学んで、
一番やりたい分野を探せるのが魅力

	月	火	水	木	金	集中不定
1時限		学術リテラシー	スペイン語初級 (文法Ⅱ)			臨床心理学概論、 明日を生きる ための心理学、 ジェンダー論、 日本史概論
2時限	人文科学通論	健康と科学・ 理論と実践	クリティカル・ リーディング	生物と環境	社会心理学概論Ⅱ	
3時限	スペイン語初級 (文法Ⅰ)			データサイエンス 入門B	アカデミック・ イングリッシュ	
4時限	心理学概論Ⅱ					
5時限				新入生ゼミナール		

信州大学人文学部は他大学とは違い、入学時に専攻が決まっていません。私はそこに魅力を感じて進学しました。

私は以前から心理学に興味があり、大学では心理学についての勉強がしたいと思っていたのですが、高校の授業や受験勉強を通して哲学や日本史にも興味を持ちました。一般的に大学に進学するととなると受験時に専攻を決めることとなりますが、信州大学人文学部では2年進級時に専攻ごとに分かります。いろいろな分野の勉強をしながら自分が今後一番やりたい分野を1年かけて探せるということに魅力を感じ、進学したいと思いました。そして今、人文学部の専門科目で、前期では心理学系に加えて日本史の授業をとり、後期では哲学の授業を取ろうと思っています。

また、大学で具体的にどの分野の勉強をしたい

か決まっていなくても、人文学部の必修科目の「人文科学通論」という授業で各分野の詳しい説明を聞くことができるので、それから考えるのもいいと思います。パンフレットなど文章の説明を読んでもイメージしづらい分野でも、先生方の話を伺うことで自分の気になる分野が必ずあると思います。

さらに、信州大学では1年次の学生が学部や文系理系に関係なく受けられる「共通教育科目」が多く設けられていて、自分の好きな分野の授業を受けることもできます。普段は関わることの少ない他学部の学生などたくさんの人と出会うことができると楽しいと思います。

学科や学部に関係なく、興味のあることを勉強できるのはとても幸せです。この学部で自分の興味を持てる分野と出会ってみませんか。



2年 | 長塚 萌 | 心理学・社会心理学コース

異なる分野が互いに絡まり繋がっている
カリキュラムは有意義な学びができる

	月	火	水	木	金	集中不定
1時限		文化情報論特論Ⅰ (心理学統計法)		日本史概論Ⅰ	アカデミック・ イングリッシュ フェイズⅢ	発達心理学、 障害者・障害児 心理学
2時限				社会心理学 基幹演習Ⅰ		
3時限		人体の構造と 機能及び疾病		文化情報論概論Ⅰ		
4時限	心理学概論Ⅱ		心理学基礎実験Ⅰ	心理演習		
5時限	公認心理師の 職責		心理学基礎実験Ⅰ	ドイツ語 中級Ⅰ		

私は中学生のころから心理学に興味があり、「心理学を学びたい」その一心で人文学部に入学しました。入学当時は、人文学部の「心理学・社会心理学コース」以外にどんなコースがあるのか知りませんでした。しかし、1年次にさまざまな教養科目や専門分野の概論を受講する中で、こんな分野・学問もあるのだと世界が広がり、どのコースもとても魅力的で、新たな興味を持つきっかけとなりました。さらに、友人の話、そして先生の印象から面白そうだなと思った授業を幅広く自由に受講することができました。今学びたい分野がはっきりしていなくても、人文学部なら1年次を通してじっくり悩むことができます。もちろん自分のやりたいことがはっきりしていると、好きな学問をとことん追求し学びを深めることができま

す。私はこの1年間を通して心理学だけに固執せず、哲学や社会学、統計、また他国の文化や手話などの授業を受講する中で、改めて自分のやりたいことは何かを見つめなおすことができました。そして、異なる分野でも互いに絡まり繋がっていることが実感でき、とても有意義で学びの多い1年間となりました。

また大学生活では、所属コースの先生はもちろん、他コースの先生方も学生の履修や進路、その他生活の不安に真摯に向き合い優しく寄り添ってくださいます。施設やサークル・部活も豊富で、誰もが自由に充実した学校生活を送ることができると実感しています。皆さんもここ人文学部で興味を深め、やりたい学問を追求してみたいでしょうか。



3年 | 黒釜直人 | 比較言語文化コース ドイツ語学・ドイツ文学分野

足元には数多くの道があり、
一つの道を歩きながらもう一つの道を歩くこともできる

	月	火	水	木	金
1 時限					
2 時限				西洋文化事情 I	社会心理学概論 I
3 時限		ドイツ語 コミュニケーション 上級	ドイツ言語 文化特論 V	文化情報論概論	
4 時限	英語 コミュニケーション 中級		ドイツ言語 文化発展演習 V	フランス語 文化概論 I	ドイツ語文学 基幹演習 II
5 時限	比較文学特論 V				

私がドイツ文学に興味を持ったのは高校生の時にゲーテの『ファウスト』を読んだことに起因します。私は『ファウスト』を日本語訳で読んだのですが、その訳が古風なものであったためきちんと理解ができませんでした。その時に私はドイツ語で読んでみたい！と思うようになり、ドイツ文学へと興味が派生しました。しかし、それだけが信州大学人文学部を志望した理由ではありません。

現在、私はドイツ文学を専攻してしていますが、人文学部にはさまざまな分野があります。そしてその選択肢の多さが信州大学人文学部の強みだと私は考えます。実際に今は社会心理学といった文学とは全く異なる分野の授業に出席することができ、3年生になっても自分が興味を持っていたものとは全く異なる分野において新たな発見をすることができます。このような選択肢の多さが魅力的だからこそ、私は信州大学を志望しまし

た。

逆に言うと、自分のやりたいことが明確でなくても、さまざまな体験を通して自分の目指すものを見つけることができます。私の友人の中には元々全く興味のなかった分野を専攻して楽しそうに学んでいる人も多くいます。

これを読んでいる皆さんの中には人文学部と聞いて何をしているのか具体的に思いつかないという人もいるでしょう。それでいいのです。なぜなら人文学部では自分のやりたいことができるからです。私たちの足元には数多くの道があり、一つの道を歩きながらもう一つの道を歩くこともできます。

何を学び、何になるか。それを決めるのは貴方ですが、人文学部にはその選択肢が沢山あります。皆さんと机を囲む日が来ることを心待ちにしております。



4年 | 玉田梨々花 | 比較言語文化コース 比較文学分野

4年間かけて自分なりの
“人文学の花園”を作ませんか？

	月	火	水	木	金
1 時限	博物館資料論				
2 時限	博物館 資料保存論				
3 時限	比較文学特論 VI				
4 時限	比較文学 基幹演習 III				
5 時限	比較文学特論 V				

初めまして。ようこそ、人文学のお花畑へ。

早速ですが、私にとって人文学部で学ぶとは、4年間かけて自分なりの人文学の花園を作ること。授業はすべて、そのための種だと思っています。芸術の種、社会学の種、各国言語・文学の種……。とはいえ、種って一目見てどんなお花が咲くかわからないこともありますよね。でもね、我が学部には咲かない種はありません。だから、あまり気負わず、少しでも気になる種(授業)から選んでみてはいかがでしょうか。

さて、こう言ってよければ、種選びよりも大切なのは土壌——知性や感受性づくりでしょう。きちんと耕されて栄養を蓄えた土でこそ、種を十分に育てられましようから。頭も土壌も、柔らかいのがいいですね。私も日々頭をほぐすため、「エウレカ！」の光を当てたり、涙で水やりしています。

されど今後、人為的・天災的な混乱が地球に差し迫ってくるでしょう。私たち若者は、風雨の最前線に曝されるのでしょうか。それでも私は、私の人文花のお花畑がいつまでも健やかに唄いでいると信じています。くじけそうな時も、ふと後ろを振り向けば大輪たちが背後を守ってくれている……って、なんだか心強くありませんか。

そんな知の庭をいっぱい広げられるのが、信州大学の人文学部です。さあ、7コースの種は揃っています。あなたならどんな一粒から始めて、やがてどんな絶景を描くでしょうか、ぼんやり想像してみてください。きつと、あなたを待っている学びの種がありますから、願わくば上へ上へと伸ばしてください。大事に大事に育ててください。あなたの胸いっぱい、お花畑が広がりますように！



呉 易林

大学院
総合人文社会科学研究科
人間文化学分野
修士課程2年

「心学」を知るために、中国だけではなく、
日本近現代について学びたかった。

信大に進学してから既に2年ほどになりますが、新型コロナウイルス感染対策のために、去年初めて登校することが出来ました。それから、儒学の中の「心学」という思想を深く研究するために、幅広い範囲の「心学」の中から、王陽明の高徒である王龍溪を選びました。現在は、王龍溪の思想を中心として、中国に関する研究だけでなく、日本近現代の研究文献も参考にしており、指導教員からは、それらに関する良質な書物を教えていただきました。『龍溪会語』を原典で読むのは大変ですが、その過程に、自分なりの思考が深められるのが欣快です。私の研究は着実に進んでいると思われれます。

哲学思想論コースでは、東洋思想や西洋哲学はもちろん、インド仏教や色の哲学なども学ぶことが出来ます。異なる領域の論説を学ぶことで、自分の視野を広げられます。東洋思想を中心に、異文化の思想との検討は思想史の楽しさに気付く窓口になりました。将来、就職しても、異なる方面の考え方を活かせるように頑張ります。

TOWARD THE FUTURE

卒業生たちの進路 & 入試案内





跡部凜花

2022年卒業
軽井沢町役場

きっかけは、どこにあるかわからない

在学時、私は芸術コミュニケーション分野に所属していました。ここでは、美術・音楽・身体表現といった芸術の諸分野で、社会との関係性について実践的かつ領域横断的に学びます。

新型コロナウイルス感染症の影響により、3年次の講義はほとんどがオンラインで行われました。この時期の講義でとったノートのなかに、いまでも印象的な一文が残っています。

「芸術がコミュニケーション（伝達手段）であるというよりも、芸術とともに／によってコミュニケーションがひらかれる」

この言葉は、外出制限により社会と断絶していた当時の私にとって、ある種の救いになりました。漠然と「コミュニケーションの起点となる芸術を社会に接続する役割を担っていきたい」と考えるようになり、現在従事している行政職を志望する一つのきっかけになったのです。

いつかはかならず自分の進む道を選択しなければなりません。きっかけはどこにあるかわからないものです。信州大学人文学部では全7コースの学問分野を、すそ野をひろげて学ぶことができます。はじめは興味がなくとも、次第に深みへはまっていくことも少なからずあるかもしれません。ひろく深く学ぶことができるこの環境で、きっかけを探してみてください。



折井大哲

2021年卒業
丸善出版株式会社

卒業後の将来を考えるにあたり、 まず自分の心の内を言語化する力が必要。

私は在学時、比較文学分野というところで学んでいましたが、「分野」という概念は解体されるようで、だんだんと過去がしっかり過去になってゆくのだな、という感慨があります。私が過ごした時間はすでに過去のもので、そこから個人的な体験を語っても、それはすでに、あまり読む方の役には立たない情報になっているかもしれません。

「学部を卒業した後の人生どうしようかな」ということを考えるにあたり、自分の心の内を言語化する力がまずは必要だと思います。つまり、何が好きで、何が嫌いで、許容できるもののラインはどこで……ということですね。そういったことを考える際、人文学部で養われる力はきっと助けになることだと思います。でも、そうでなくてもいいと思います。20歳前後で何か人生のすべてが決まってしまうわけではなく、偉そうにこの文章を書いている私も、読んでいる皆さんといくつも違います。この先何を選んでも、どうせいつかは何か後悔すると思うので、せめて自分で選んだということには納得できるといいと思います。選ぶということは考えるということですから、やっぱりいづらか、人文学部で考えることは助けになるでしょうか。

入学された方にも、ここを読んだけど入学はしなかった方にも、どうか行く先に幸が多くありますように。



前田智子

2020年卒業
宇都宮家庭裁判所
栃木支部

自分の興味にじっくり向き合うことで、 目標が見えてくる

大学を受験するに当たっては、自分のやりたいことや、学びたいことを考えると思います。ただ私は、高校生のころに自分が何をやりたいのかよくわかっていなかったし、その学部でどんなことが学べるのかよく知らなかったのも、大学選びや学部選びに戸惑った記憶があります。信州大学人文学部は、1年生の間は、人文学のさまざまな分野の概論を学び、2年生から専攻分野を決めて、より専門的に学んでいくという特徴があります。そのため、大学入学後、実際に学問に触れながら、自分の興味にじっくり向き合うことができました。自分の興味がわかってくると、自然とやりたいことが明確になり、目標を立てて、実行することができたように思います。私の場合は、留学という夢を叶えることができました。

今私は、家庭裁判所で家庭裁判所調査官として働いています。仕事でお会いする方々は、その方の人生においてとても困難な状況にある方が多く、どうすればよりよい解決ができるのか、毎日悩んだり迷ったりしていますが、大学で得た知識や経験すべてが生かされていると感じています。

最後に、信州大学では、全国から生徒が集まってくるので、いろいろな友達ができますし、上高地や阿智村などのリフレッシュできる観光地が近く、勉強以外の学生生活も充実させることができるのではないかと思います。



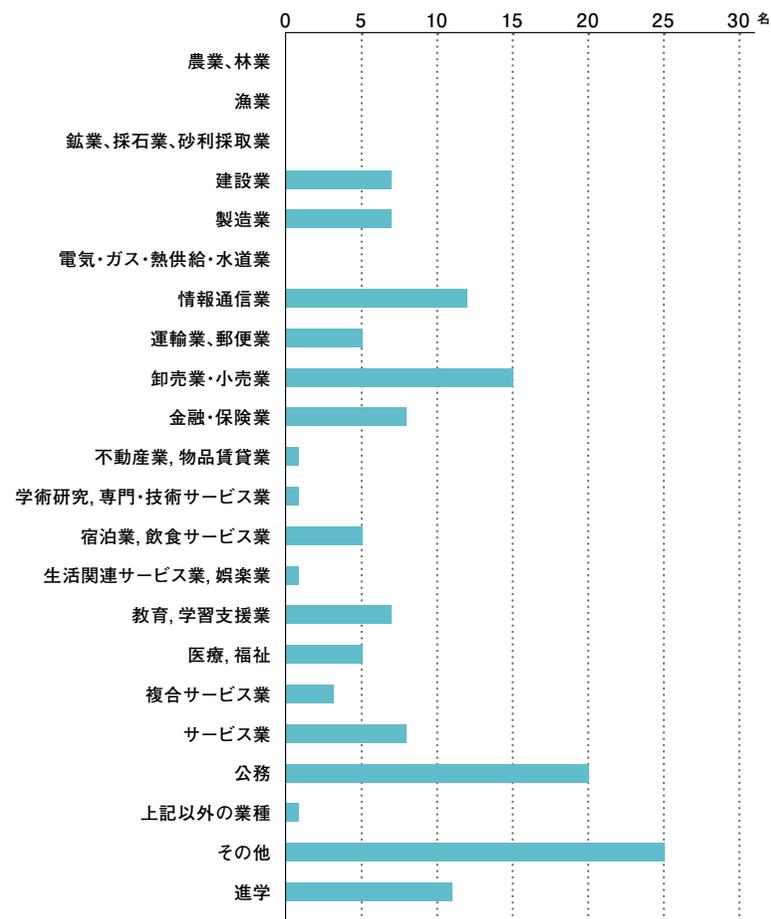
蛸名 新

2018年卒業
青森県庁

卒業論文のテーマは人生を費やして考え続けるもの 学びたいときに学ぶことができる大学生活はとても貴重。

私の大学生活は主に二つの刺激を受けていた。一つは、生活環境の変化である。私は青森県出身で、大学時代を松本市で過ごした。全国から集まった学生たちとの触れあいは視野を広くさせ、気づきも与えてくれた。二つは、二次数以降コースに所属してからさまざまな分野の学生、先生方と交流を持ったことだ。私は歴史学コース日本近現代史分野に所属していたが、卒業論文で扱うテーマを決めるきっかけとなったのは社会学のフィールドワークに参加したことである。接する情報や問題、もの見方や考え方は偏ってしまいがちである。講義はもちろん、廊下での立ち話、時には食事をともにしながらの語りによって自分にはないものを知り、また捕うことができた。卒業論文を書くにあたり、ある先生に伺った「卒業論文とは人生の墓標である」という言葉が強く印象に残っている。卒業論文のテーマは、卒業後の人生を費やして考え続けるものだと思う。大学卒業後、学びたいときに学ぶことができる環境がいかに貴重だったかを実感している。自分の大学生活、特に勉学については多くの後悔がある。もちろん、自らの選択に悔いを抱えずに居られる人は少ない。これから入学する皆さんは、後悔が少しでも少なくなるよう、限られた時間で一生懸命に学んでほしい。

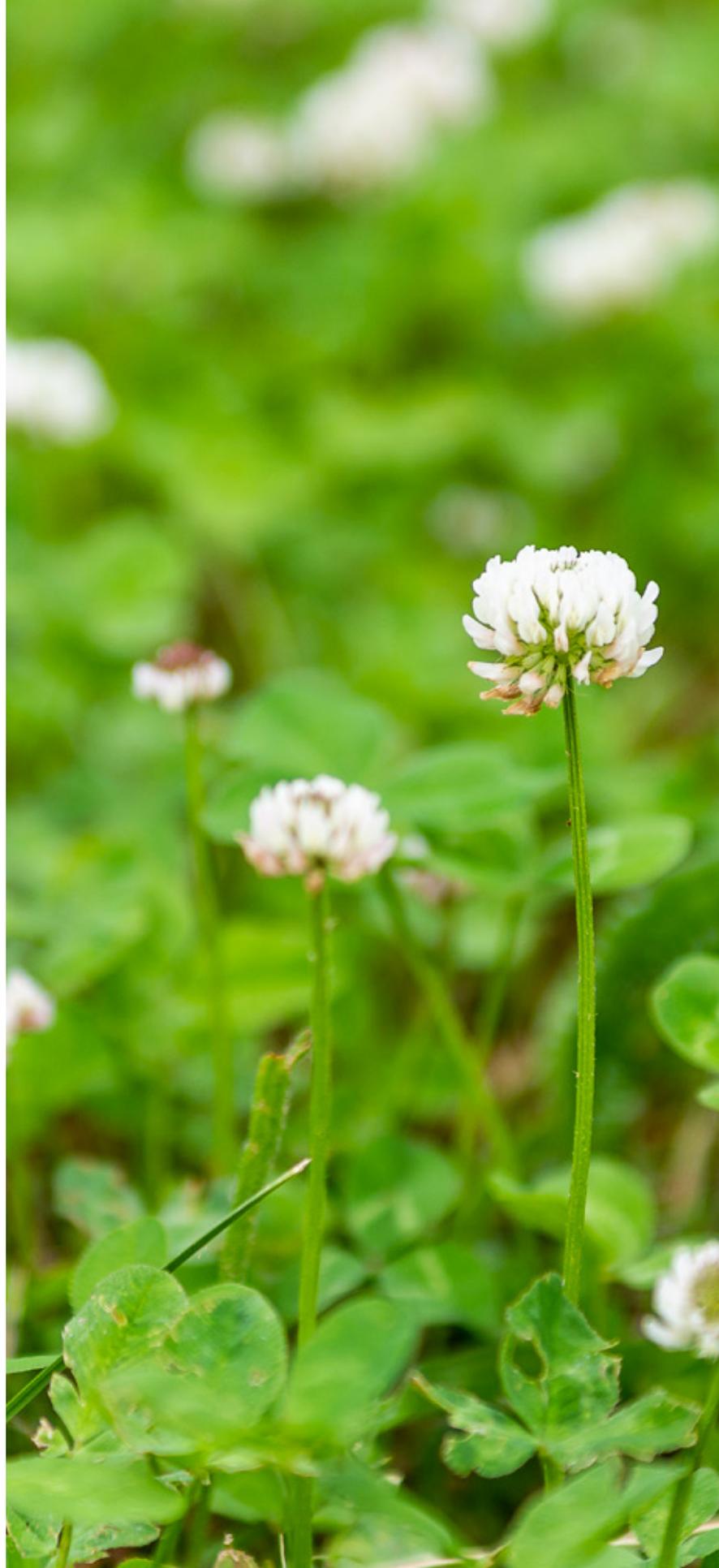
卒業後の進路状況（2022年3月の卒業生）



人文学部の学生の就職先は色々な業種に広がり、実に多様です。以前は、教員や公務員に多くの学生が就職しましたが、近年は教員、公務員に限らず、多方面への就職が目立つようになりました。

また毎年、本学あるいは他大学の大学院に進学する学生も少なくありません。現在の激動する社会では、独自にもの考えることができる、人として魅力のある人材が求められています。人文学部の教育では人間そのものについて考え、一見すると直接就職や企業にかかわらないことが多いかもしれませんが、それだけに時代に流されない人材を育成しています。豊かな人間性を持つ、ユニークな卒業生が、社会のあらゆる方面に就職し、活躍しているのです。

本学部では、卒業する学生のために独自に就職関連講座などを開き、進路相談や各種の情報提供につとめています。また学生のインターンシップ体験実習活動についても積極的にサポートし、学生の個性に合った就職ができるように、学部としても就職指導に力を入れています。



取得できる資格等

- ▶ 高等学校教諭一種免許状（国語・地理歴史・公民・英語）
- ▶ 中学校教諭一種免許状（国語・社会・英語）
- ▶ 学芸員
- ▶ 社会調査士
- ▶ 公認心理師
（受験資格として更に実務経験もしくは公認心理師対応大学院進学が必要）
- ▶ 日本語教員養成課程（26単位以上）の修了証書

信州大学大学院 総合人文社会科学研究科(修士課程) 総合人文社会科学専攻

総合人文社会科学専攻は、「人間文化学分野」「心理学分野」「経済学分野」「法学分野」の4つの分野からなり、人文科学から社会科学にわたる幅広い学問分野を網羅した教員グループによって構成・運営されています。詳しくは大学院HPなどをご覧ください。



2023 (令和5) 年度一般入試

詳細については、必ず学生募集要項等でご確認ください。

入試案内

前期日程

【950点満点】
 大学入学共通テスト(3教科3科目、又は3教科4科目、又は3教科5科目) +
 個別学力検査(総合問題) + 調査書

教科	科目	受験を要する科目等	配点
国語	① 国	左の科目	200
	② 数Ⅰ, 数Ⅰ・数Ⅱ	左の2科目から1科目選択	
数学	③ 数Ⅱ, 数Ⅱ・数Ⅲ, 簿, 情報	左の4科目から1科目選択	100
	④ 世Ⅱ, 日Ⅱ, 地理Ⅱ	左の7科目から1科目選択	
地歴 公民	⑤ 現社, 倫, 政経, 倫・政経	左の4科目から2科目選択	100
	⑥ 物基, 化基, 生基, 地学基	左の4科目から1科目選択	
理科	⑦ 物, 化, 生, 地学	左の4科目から1科目選択	200
	⑧ 英, 独, 仏, 中, 韓	左の5科目から1科目選択	
外国語			200
個別学力検査(総合問題)			400
調査書			50
合計			950

後期日程

【650点満点】
 大学入学共通テスト(5教科6科目、又は5教科7科目、又は6教科6科目、又は6教科7科目) +
 個別学力検査(小論文) + 調査書

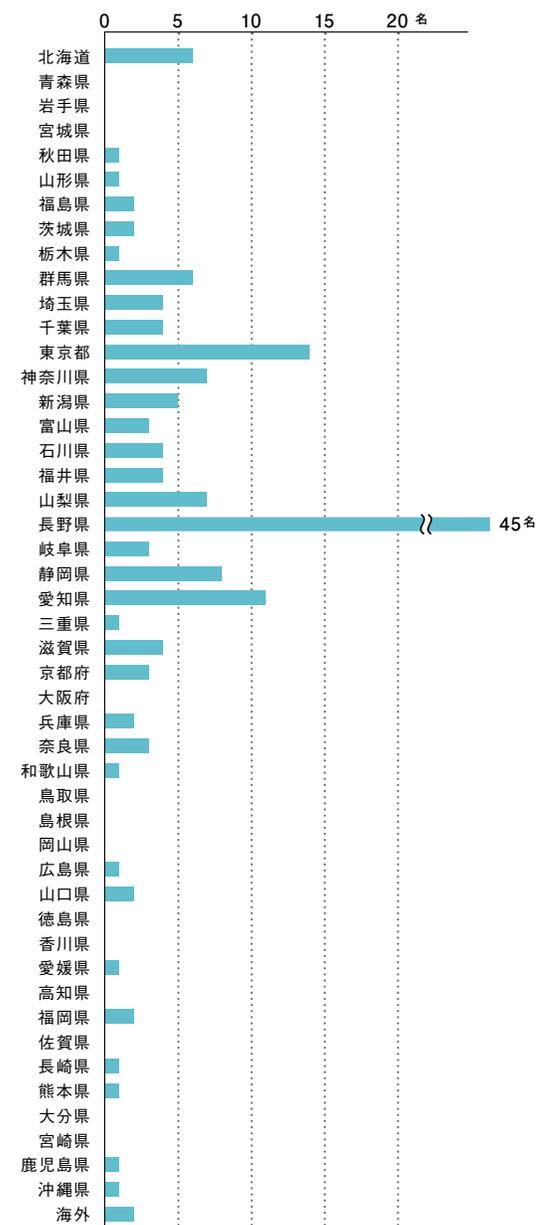
教科	科目	受験を要する科目等	配点
国語	国	左の科目	100
地歴 公民	世Ⅱ, 日Ⅱ, 地理Ⅱ	左の7科目から2科目選択	100
	現社, 倫, 政経, 倫・政経		
数学	数Ⅰ, 数Ⅰ・数Ⅱ	左の6科目から1科目選択	50
	数Ⅲ, 数Ⅲ・数Ⅳ, 簿, 情報		
理科	① 物基, 化基, 生基, 地学基	左の4科目から2科目選択	50
	② 物, 化, 生, 地学	左の4科目から1科目選択	
外国語	英, 独, 仏, 中, 韓	左の5科目から1科目選択	100
個別学力検査(小論文)			200
調査書			50
合計			650



2022年度入学者選抜状況

募集人員	志願者	受験者	合格者	入学者
155	664	430	189	162

2022年度入学者出身地別一覧



お問い合わせ先・資料請求

信州大学人文学部
SHINSHU UNIVERSITY Faculty of Arts

〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1

Tel.0263-37-2236

<https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/>



JR松本駅「お城口(東口)」を出て右前方、
松本バスターミナル1番のりば「信大横田循環線」、「浅間線」に乗りし
「大学西門」下車、徒歩2分

※ JR篠ノ井線は、北松本駅に停車しません

発行：信州大学人文学部

編集：engawa

学内風景撮影：円山なみ

デザイン：GOAT

※無断転載禁止

